The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ムスリム社会における社会貢献 : 現代シリアのアブー・ヌールの事例
Author(s)	高尾, 賢一郎
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/18049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

ムスリム社会における社会貢献

—現代シリアのアブー・ヌールの事例—

高尾　賢一郎*

Social Contribution in Muslim Society

Case of Abu al-Nur in Modern Syria

TAKAO Kenichiro

論文要旨

本稿はムスリム社会における貧困者救済を中心とした社会貢献を概観し、それを踏まえて現代シリアの活動を事例にその活動の今日的展開を考察するものである。ムスリム社会には喜捨や寄進といった各種社会貢献活動が根付いているが、近代以降はその影響が弱まった。しかし現代シリアのアブー・ヌール・モスクは、指導者クフターローの政教、官民にまたがった活躍に連動して多彩な活動を展開した。またモスクに併設された公益法人アンサールの「貧困撲滅」活動を通して、アブー・ヌールは宗教組織としての再評価を得ることに成功した。このように本事例の特色は、歴史あるムスリム社会の一方で世俗主義社会である現代シリアを舞台とする点、そして宗教組織としての性格を損なうことなく「宗教活動」と「社会活動」の両立を果たした点にある。

キーワード　アブー・ヌール、喜捨、アフマド・クフターロー、現代シリア、ワクフ

This paper gives an overview of social contribution activities in Muslim society, with a special focus on anti-poverty relief efforts in contemporary Syria. Social contributions such as almsgiving and endowment have lost influence in modern Syria, but the Abu al-Nur Mosque, under the leadership of Aḥmad Kuftārū has successfully carried out various activities by straddling the public-private divide. In particular, the poverty-elimination efforts of the mosque's “Ansar” public service organization have bought about a reevaluation of religious organization. The case of Abu al-Nur Mosque and Ansar illustrate the possibility of religious activity in the service of social action, in the context of a historically Muslim society that is currently secular.

Keywords: Abu al-Nur, Almsgiving, Aḥmad Kuftārū, Modern Syria, Endowment

* 同志社大学大学院神学研究科・博士後期課程／在サウジアラビア日本大使館・専門調査員・takaoken@aol.com

1. 問題の所在

本稿はムスリム（イスラーム教徒）社会における貧困者救済を中心とした社会貢献をテーマとし、それらの活動を概観するとともに、現代シリアの事例を通してその今日的展開を考察することを目的とする。従来、ムスリム社会には喜捨や寄進といった貧困者救済を含む各種の社会貢献活動が根付いていたが、近代の国民国家成立以降、特に中東においてその影響は弱まったことが指摘されている。その状況は長いイスラーム史を有するシリアにおいても例外ではない。しかし現代シリアのアブー・ヌール・モスクは、当地を代表するイスラーム学者であったアフマド・クフターロー（1915-2004）の指導の下、貧困撲滅を目指して 20 世紀後半以降に様々な社会貢献活動を展開してきた。本稿はアブー・ヌール・モスクがどのような背景でそれらの活動を成功させたのか、またそれらの活動がどのような意義を持ち得たのかを確認することで、ムスリム社会を舞台とした宗教と社会貢献を巡る状況について考察する。

「宗教と社会貢献」は、特定の地域・社会の史実解明によって蓄積を持つテーマである(1)。しかし今日、特に欧米や日本を舞台としてその社会的意義を訴えることに関してはある種の新しさを含んでいると言える。当該研究に見られる「ソーシャル・キャピタル」（社会関係資本）概念への言及からも窺えるように［櫻井 2011］、宗教と社会貢献についての検討は、社会において機能分化された一部としての宗教がその枠を超えて、独自の教義や組織力を活かして社会に貢献する営みの展望を問うものである。したがって、そこでは社会における宗教の役割や影響力を非あるいは不可と見なす社会構造が前提とされやすい。この点から欧米や日本における宗教と社会貢献を巡る研究は近代化論、特に 1960-70 年代に広まった世俗化論以降の課題の一つとして位置付けられる向きもある。

他方、ムスリム社会を対象とした研究は「近代化＝世俗化≠宗教」の図式に基づいた近代化論／世俗化論の主張に対して慎重であり［大塚 2004: 170; Voll 1994］(2)、ムスリム社会を舞台とした「宗教と社会貢献」という課題設定には世俗化（論）の以降も以前もないことになる。しかし実際には

20 世紀以降、特に中東のムスリム諸国で世俗主義政策が敷かれ、その上で起こったこの四十年余の「イスラーム復興」をムスリム社会の世俗化（主義）以降の様相と捉えることは可能である。ただしそれらを対象とした研究の多くは「中東 Middle East」という地政学概念を冠して「中東研究」と呼ばれるように、主として「イスラーム」の旗印が掲げられた当該地域・社会の政治的事変に焦点を当ててきた。その結果、政教分離社会あるいは国民国家の近代国家的枠組みでの宗教の役割の変遷を慎重、素朴に訴える欧米や日本を舞台とした研究と、宗教イスラームの社会への影響力を政治レベルに及ぶものとするムスリム社会を舞台とした研究との間には、研究課題の成果をどの学術分野に還元するかという点で差異が生じる。ムスリム同胞団（於エジプト、ヨルダン等）やヒズブッラー（於レバノン）といった団体は、その差異を示す好例である。それらは「イスラーム」を大義に掲げ、物資配給や病院建設といった各種の「社会貢献」活動を積極的に行なっている。しかしその反体制的武装組織という性格から、それらを考察対象とする研究が政治学または政策科学（地域研究）としての「中東研究」の垣根を越えることは極めて稀である。同様に、欧米や日本における宗教と社会貢献を巡る研究が上記団体を考察対象とする機会も皆無と言ってよい。

以上の差異を意識した上で、本稿は以下の構成をとる。まず本稿は貧困者救済を中心としたムスリム社会の社会貢献活動の概観を目的に、それらを是とした教義の面（第二節）、そしてその教義によって命じ、勧められる貧困者救済の活動を可とした制度の面を紹介する（第三節）。そして以降の節において現代シリアの事例へと移るが、そこでは当地の世俗主義政策を巡る社会状況を考慮しつつ、宗教家アフマド・クフターロー及び彼が指導したアブー・ヌール・モスクの事績の意義を考察する（第四、五節）。このように本稿は、ムスリム社会の信仰生活に根付いた社会貢献活動の性格を描きつつ、「世俗化」の様相を呈する状況を事例とすることで、上述した「宗教と社会貢献」を巡る研究の差異の解消に資することを目指す。

2. 貧困者救済の教義

ムスリム社会の文脈における「貧困者」は仏教やキリスト教等の場合と同様に多義的で、また隠喩的である。「貧困者」を指す語として一般に用いられるアラビア語「ファキール faqīr」は時に篤信者や聖者を指し、イスラームの預言者ムハンマドは「天国を見ると、その住人の大部分は貧しい人々であり」（ハディース「人生における恵み」51-1）といった言葉を遺している。

とはいえ、イスラームの聖典クルアーンやハディース集（ムハンマドの言動の伝承集成）の中で描かれる「貧困者」は、やはり多くの場合において日々の生活を満足に送ることができない者を指し、ムスリムは彼らを助けるよう命じられる。貧困者救済の大義はムスリムに課せられた義務行為である「五行（五柱）」（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）の「喜捨」によって明示される。本節ではムスリム社会の貧困者救済活動における教義上の基礎と言える喜捨に焦点を当て、まずクルアーンやハディース集を通して明らかになるその性格を整理する(3)。

喜捨は次のクルアーン及びハディースの節句に見られるように、ムスリムの基本的義務である(4)。

> 礼拝の務めをよく果たし、喜捨を出し惜しみせず、どこまでもアッラーにお縋り申すようにせよ。（クルアーン 22 章 78 節）

> イブン・アッバースによると、預言者はムアーズをヤマンに送り、その地の人々に、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドは神の使徒である」と唱えるようにすすめ、もし彼らがそれに従うならば、アッラーは一日五回の礼拝を義務として課していることを彼らに教え、もし彼らがこれに従うならば、アッラーは富んだ者の財産の一部を取って貧しい人々に与えるために、喜捨を課していることを教えるように命じた。（ハディース「喜捨」1-1）

また喜捨は、アラビア語の原語「ザカート zakāt」が「浄める」という意味の動詞「ザカー zakā」に由来するように、単なる利他主義的行為ではな

い。以下にあるようにその目的はむしろアッラーより預かった財産と自身の浄め、それを通した来世における自身への報賞である。

> アブー・アイユーブによると、或る男が預言者に、天国に入るためには何をしたらよいでしょうか、と尋ねたとき（中略）預言者は「それはいとも簡単で、アッラーを崇め、それ以外の何ものも拝まず、礼拝を行い、喜捨を差し出し、身内の者と結びつくことだ」と答えた。（ハディース「喜捨」1-2）

> 物惜しみするな。さもないとアッラーも貴方に対して物惜しみされる。できる限り施すように。（ハディース「喜捨」22-1）

> 礼拝と喜捨と善行の勧めと悪行の禁止によって（著者注：その人の過ちは）消される。（ハディース「喜捨」23-1）

喜捨の受給条件はクルアーンにおいて、次の 8 項目と定められている[(5)]。

> （集まった）喜捨の用途は、まず貧者に困窮者、それを徴集して廻る人、心を強調させた人（著者注：イスラームに改宗しつつある、またはした人）、奴隷の身受け、負債で困っている人、それにアッラーの道（著者注：宣教活動）、旅人、これだけに限る。（クルアーン 9 章 60 節）

ただし上記以外を対象とした喜捨は必ずしも背徳的行為とはならず、ムハンマドは盗人、姦通した女性、また富者に対して知らずに行なわれた施しの意義を示唆する。

> すると突然、天使が現れて、「汝の施しによって、盗人は盗みを慎むようになるであろうし、姦通の女は姦通を慎むようになるであろうし、さらに金持ちは恐らくこれを手本にして、アッラーから与えられた財産の一部を喜捨として差し出すであろう」と言った。（ハディース「喜捨」14-1）

このように、喜捨は全てのムスリムに課された基本的義務として、彼らが来世における救済に向けて励む好機として、また同胞によって構成される社会の秩序と平安に資する徳育として定められる。それは個人間の贈

与・受贈に留まらない、地域・社会の互恵性構築への貢献となる。

ムハンマドの時代以降、喜捨は税制化され、政策の一環に組み込まれる等して公的機関による徴収が計られた(6)。近代以降は国家による税制度が広く採用されたが、「ザカート」に関しては徴収の目的と方法において上述の教義を背景とし、喜捨と公租の両面を併せ持った制度として存在している。

例えば「福祉国家」と呼ばれるサウディアラビア王国では、憲法に相当する統治基本法（1992 年 3 月公布）の第四章「経済原則」の項において「ザカートの徴収及び使用はイスラーム法に則してなされる」（第 21 条）よう定められており、現在は労働社会事項省が管轄している。ザカートが「経済原則」に含められている点、また外国資本と外国人にはザカートの代わりに所得税が課せられている点を通して、ザカートの税金としての位置付けは明白であるが［福田 2000: 74-75］、一方で国家や有力王族による慈善事業や寄付の事例は多い。最近では 10 兆円弱に及ぶ福祉政策が 2011 年 3 月 18 日の国王令によって表明された。それは「怒りの日」とインターネット上で名付けられた反体制デモ予告日である同月 11 日にデモが実現しなかったことを受けたもので、さらなる国家警備体制に向けた高揚とデモを行わなかった市民への謝意として公務員や学生の手当引き上げ、失業者や求職者に対する手当給付、住居整備等の政策を含んでいた(7)。また 3 月 11 日の東日本大震災を受けては、現国王の甥が代表を務めるワリード・ビン・タラール財団による震災被災者への巨額の寄付が発表された(8)。無論「ザカート」の受給条件をムスリム及び先述の 8 項目のとおりとする原則自体はサウディアラビア宗教界の見解の中で強調されるものの［al-Jiraysī 2011: 855f.］(9)、施し行為自体への美徳の意識は強く、それによってサウディアラビアは福祉国家と宗教共同体という二つの顔を同時に示している。6 月 20 日には、新たに国内の孤児や貧困家庭の子供に対する教育援助として約 100 億円の予算割り当てが国王令で打ち出される等(10)、クルアーンにある「汝らは互いに競って善行にはげむがよい」（2 章 148 節）との節句に忠実であるようにも見える。

3. 社会貢献の制度と空間

喜捨の税制化やサウディアラビア王国は、貧困者救済をトップ・ダウンで推進し、全国規模で慣例化させた例である。一方で地域、草の根レベルで広範な貧困者救済を支えてきたムスリム社会の社会貢献の例として挙げられるのは、「ワクフ waqf」と呼ばれる寄進制度である。

「止まる」を意味する動詞「ワカファ waqafa」の派生語であるワクフは、ザカートと異なり、クルアーンではなく後のイスラーム法によって整備された社会制度である。法学上の規定としては、財産所有者がその財から上がる利益を特定の対象に用いるように固定すること、即ち所有権の移転の停止と用途の固定を指す。法学派間に通底したワクフの条件は、善行目的であること、対象が恒久的であること、用途設定者が所有権を有すること等である［岩武 1999: 270-272; Leeuwen 1999: 40］。

ワクフとなる対象は財産所有者の子孫や不動産といったものが多いが、上述のようにその対象は恒久でなくてはならない。したがって永く存続する公共施設や、二次的な対象としてそれら施設を利用する市民等が設定されうる。その結果ワクフは、農地、公営宿舎、モスク、修道場、また学校等の管理といった地域のインフラ、そしてそれら諸施設の従業員の人件費及び利用にあたっての諸費用の捻出といった、福祉全般をカバーする機能を担ってきた［後藤 1993: 96-98; Salvatore 2007: 17］。

福祉全般という点に関して、［オズトルコ 2010］はオスマン朝におけるワクフの豊かな歴史を描いている。それによるとワクフは、貧困者が生まれる家、教育を受ける学校、信仰を学ぶモスク、利用する交通路、旅先の宿舎、働く職場、治療を受ける病院、埋められる墓地とその管理、食べ物や給与、衣服、そしてそれらに要する費用等、生活の全てを賄うもので、まさに「ゆりかごから墓場まで」の保証を実現する制度であった(11)。またそれは、ワクフとしての処分権固定を監督するイスラーム法学者、そして彼らを監督し、ワクフの組織化によって社会の経済を支える官僚によって公然と支えられた、官民協同で進められるある種の国家事業であった［Leeuwen 1999: 86-89］(12)。

しかしそれ故に、近代におけるムスリム諸国の経済的衰退、西欧による

植民地支配、また世俗主義体制がワクフに与えた影響は大きかった［岩武 1996: 253］。例えば植民地政策が進む中での宗主国による管理、世俗主義体制が敷かれる中での政府による国有化や売却、また中央政府によるワクフの没収や売却等である。それによって草の根の福祉活動の資源・財源としてのワクフの性格は弱まった(13)。今日、ムスリムが多数を占める諸国では、しばしばワクフの名称を冠した省庁レベルの政府機関が置かれ、それらはモスクの管理を担当している(14)。しかし、例えばシリア等の世俗主義、専制主義的与党体制下における「モスクの管理」が意味するのはむしろ「集会の禁止」であり、上述したようなワクフの国有化、財産没収という側面も見られる(15)。

その意味では近代以降、各地域や共同体は新しい時代への個別の対応を迫られた。その中で喜捨やワクフを下地としつつ貧困者救済に積極的であった例として挙げられるのは、スーフィー教団の活動である。次節以降の現代シリアの事例でも登場するスーフィー教団は、特定の道統を守り、またそれに名を連ねる導師を擁して信仰の修行に励むスーフィズムの集団である(16)。檀家制度のように宗教が地域のメンバーシップを形成する習慣を持たないムスリム社会において、スーフィー教団は徒弟制を通した組織力や軍事力を、社会変革や対外戦争の際に大いに発揮してきた［東長 2010］。その影響力はしばしば国家管理から独立した形での社会活動に及び、例えば［Walker 2008］は地方における福祉政策の脆弱さと国家衰退の始まりが指摘される 19 世紀オスマン朝下ヨルダンを舞台に、在野のスーフィー教団が独自に教育を中心とした各種社会貢献活動を行っていた事例を取り扱うモノグラフである。モスクや修道場での活動を中心とした教団の活動は、国内の福祉政策や衰退したワクフ、つまり近代国家と伝統制度双方の代替的役割を果たしたと評される［Walker 2008: 230］。

次節以降で事例として取りあげるシリアのアブー・ヌール・モスクもスーフィー教団を基盤としており、当地において同様の役割を担ってきた。しかしながら同モスクの場合は、在野の宗教組織でありながらも指導者の社会・政界進出と効果的に連動することで、伝統の維持と時代への適応の両立を果たした事例として殊更に興味深い。

4. アブー・ヌールによる社会貢献活動の軌跡

シリアの首都ダマスカス市内の北東部、カシオン山麓のルクヌッディーン地区にあるアブー・ヌール・モスクは、かつて十字軍戦士の廟を祀った小さく古い、伝統的な礼拝所であった。しかし 1935 年に指導者となったアフマド・クフターローによって、同モスクは様々な活動を行う組織へと変わった。それによって今日、同モスクは礼拝所に限らない宗教センター「アブー・ヌール」としてシリア市民に認知されている。本節と次節ではアブー・ヌール・モスクを事例に、ムスリム社会における社会貢献の今日的展開を考察する。まず本節は現代シリアの社会状況と指導者クフターローの活躍を通して同モスクの活動の軌跡を確認する。

現在のシリアの国境は第一次世界大戦後の英仏による中東分割統治（サイクス＝ピコ協定）に基づいたもので、1946 年にフランスによる委任統治から独立を果たしたことで今日のシリア・アラブ共和国の原型が誕生した。独立後のシリアは世俗主義やアラブ民族主義を掲げた軍事クーデタによる政情不安が続くが、アラブ・バアス社会主義党（以降、バアス党）が 1963 年に政権を掌握することで今日まで続く同党の専制体制が築かれた(17)。

独立後のシリアでは、1949 年のフスニー・ザイームからバアス党の体制に至るまで脱イスラーム型世俗主義・民族主義が目指され、その政策にはワクフの再配置も含まれていた(18)。そして特に 1970 年代以降のハーフィズ・アサド大統領期、バアス党はイスラームを旗印に社会改革を訴えるムスリム同胞団や一部スーフィー教団と衝突し、それらを鎮圧する等、宗教勢力との対立姿勢が目立った。その結果、シリアでは複数のイスラーム宗派とキリスト教宗派が共存する一方で、彼らが独自の宗教活動を行うにあたっては慎重を要する状況が続いている。

アフマド・クフターローはそうした状況に柔軟に対応できた宗教指導者である。1915 年にイスラーム学者・スーフィー導師であったアミーンの子として生まれたクフターローは、1935 年に父が指導を務めていたナクシュバンディー・スーフィー支教団の導師とその活動拠点であるアブー・ヌール・モスクの指導の任を引き継いだ。フランス委任統治下にあった当時のシリアにおいてクフターローはスーフィー教団の指導者として、またモス

クの礼拝指導者として父同様に在野の教育活動を続けた。指導者としての彼に寄せられた期待の強さが窺える次のようなエピソードもある。

> 父は夜明けの礼拝を知らせる声の一時間前に家を出て、シャイフ（クフターロー）に会いたいという情念でもって（中略）アブー・ヌール・モスクに向かった。父より遠くに住んでいる者もいた。彼らはシャイフと一緒にモスクでの礼拝に参加するために村から村へと深夜渡り歩き、朝には杖をつきながら、道中で狼やハイエナを振り払い進んだ（中略）寒さと野獣、そしてフランス軍に襲われる危険の中、道中は三時間かかったが、それでも朝の礼拝時のシャイフの講義を逃すこと以外、彼らに降りかかる恐れはなかった［Ḥabash 1996: 64f.］。

このように在野のカリスマ的宗教指導者としての地位を若くにして築いていたクフターローは、並行して 1940 年代以降、政府・自治体の任命による公立学校の宗教科教師やイスラーム法裁判官等を歴任し、次第に公人としての性格を強めていった。バアス党が政権についた翌 1964 年の大ムフティー（イスラーム法国家最高諮問官）への就任はその絶頂と言える(19)。また彼は宗教間対話に積極的な宗教指導者としてシリア国内に限らない支持を得始めた。その結果、彼の活動範囲はシリア国内からキリスト教世界、また日本にも及ぶ広範なものとなり、晩年には世界の宗教界にその名を知らしめるに至った(20)。

そして自身の肩書きが多様化する過程でクフターローはアブー・ヌール・モスクの組織編成を積極的に行った。彼は 1950 年代にアンサール慈善協会、1970 年代にシャイフ・アフマド・クフターロー財団、またアブー・ヌール・イスラーム学院といった機関をモスクに併設し、それら全ての長を務めた。こうして小さな礼拝所であったアブー・ヌール・モスクが、各種社会活動を行う当地の一大宗教センター「アブー・ヌール」となったのである。

アブー・ヌールに併設されたアンサール慈善協会（以降、アンサール）(21)は、1951 年にクフターローが「貧困者への援助」と「貧困状況の打開」を掲げてダマスカスの宗教家とともに設立し、1959 年に認可された公益法人である。その活動はダマスカス市内の数百世帯を調査し、そのうち特に貧困層に該当する 165 世帯に毎月の生活資金と衣類等の生活必需品を支給す

ることから始まった［Ḥabash 1996: 83f.］。続いてアンサールが着手したのは貧困家庭の子供を対象とした教育活動であり、当時のダマスカスの公教育に不足していたというイスラーム諸学の教育カリキュラムが用意された［Ḥabash 1996: 443f.］。

1970 年代になるとアンサールの教育活動にはおよそ 600 人の生徒が集まり、それを受けて国内外から寄付金が集まり始めた。これによってアンサールはダマスカス郊外に孤児支援を目的とした土地を購入し、1995 年、少なくとも当時の中東地域における公益法人の資産としては最大規模であるという約 300 万シリア・ポンド（当時の約 7,200 万円）の資本を蓄えて男児用の孤児院を建設した。

ところで、先述のようにクフターローは 1935 年に父からナクシュバンディーという名のスーフィー支教団の指導を継いだ。しかし一部先行研究では彼が率いるスーフィー教団は「クフターロー教団」と言い表され、その設立は 1960-70 年代とされている［De Jong 1985: 600; Luizard 1996: 364; Zisser 2005: 51］。このずれを考えるヒントはクフターローのアブー・ヌール編成とその活動領域の拡張にあるだろう。1960-70 年代、彼は大ムフティーに就任してその名を馳せた後、隣国レバノンとの関係強化を目的にバアス党政権の後押しを受けて様々な社会活動をレバノンで展開した。それは他でもないアンサールを通した孤児支援の一環としての青少年活動であり、活動はイスラエルのレバノン侵攻が激化するまで続けられた。また 1970 年代に設立されたアブー・ヌール・イスラーム学院は、アラビア語教育から専門的なイスラーム学に至るまで多くの留学生を集めた。つまり 1960-70 年代はクフターロー個人に続いて今日「アブー・ヌール」と呼ばれる彼の組織やネットワークが周辺地域において顕在化した時期なのである。

以上のように孤児支援を中心として当地における存在感を強めたアンサールは、1997 年に『アンサール慈善協会・於ダマスカス』（以降、『アンサール』）を刊行し、その活動を公表する機会を得た。同書の中で新たに明記されたアンサールの活動目的は以下のとおりである［MANI 1997］。

(1) 次の聖句を実行すること。「汝ら全部が打って一団となり、人々を善に誘い、正しいことを勧め、いけないことを止めさせるよう努めよ。そういう人たちは、栄達の道を行く。」（クルアーン 3 章 104 節）

(2) 文化の伝播と教育機関の設立、識字率の向上、質の高い教育提供、道徳の普及

(3) 敬虔で善なる行為の共有、貧困者の援助

『アンサール』におけるアンサールの活動指針は、特に学院の併設という実績を踏まえて教育活動をより前面に押し出しており、その活動内容も初期と比べると多彩なものとなっている。アンサールによれば教育こそ新たな貧困発生を防止する手段であり、そのために無償教育の場を提供しているのだという。その指針に倣い、アンサールは 1990 年代以降、貧困防止のための教育活動、そして職業訓練の充実化を図り、イスラーム教育の他、語学教室やパソコン教室の講座を設けている(23)。アンサールの職員によればそれらは「完全な世俗教育」である。宗教科目に限らない教育支援の背景には、国際協力機構（JICA）シリア事務所を通した日本政府からの政府開発援助（ODA）の獲得もある。アンサールは 2005 年に日本外務省「草の根・人間の安全保障無償資金協力」にローカル NGO として採択されて約 1,000 万円の資金援助を受けた(23)。資金はコンピューターの設備費等にも当てられ、アンサールの活動は ODA の推進するベーシック・ヒューマン・ニーズ（BHN：食料や衣類等、人間の生活に最低限必要とされるもの）を中心とした援助へと方向付けられた。1990 年代以降はクフターローが特に宗教間対話を通してその名を広く海外に知らしめた時期であり、先述の 1960-70 年代の場合同様、彼の活動とアブー・ヌールの活動の拡張が相関関係にある様子がうかがえる。

このように、アブー・ヌール・モスクはクフターローの活躍と連動してその活動領域を広げ、社会貢献活動を専門とするアンサールにおいても活動内容や範囲の拡張に成功した。次節ではそれらの活動がどう宣伝され、また評価されているのかに着目し、アブー・ヌールの事績の意義を考察したい。

5. 社会貢献活動を通したアブー・ヌールへの重層的評価

前節で述べた現代シリアにおける宗教活動を巡る事情を考慮すれば、クフターローの活躍は突出した、例外的な事績と言える。しかしそれ故に彼

とその周辺に対する評価はバアス党への批判とも重なり毀誉褒貶が相半ばするものとなった。周辺諸国を見回しても、大ムフティーに対してはしばしば専制的、時に反宗教的でさえある為政者とその政策に宗教的レジティマシーを後付けする「御用学者」という批判が起こる。しかしその中でもクフターローはローカル・レベルでの社会活動を維持することで批判の中和を比較的果たした例と言え、宗教センター・アブー・ヌールはその核となった資源である。またアンサールに関しては、シリアで公益法人を管轄する労働社会事項省によればその規模は必ずしも国内で突出したものではないが、宗教的基盤を強く維持しつつ活動を展開させている点で際立っている。本節ではアンサールの情宣活動を引き合いに出しつつ、その事績の意義を考察する。

『アンサール』では活動目的(2)の「文化」が「イスラーム文化」を指し、「教育」は特に「イスラーム法学」を中心とするという補足説明がある。活動目的(1)の内容と同(3)の「敬虔」という表現とあわせて、アンサールの活動が強く宗教的な意図と方法によって進められていることが示されている。現在アブー・ヌール・モスク地下の食堂では併設学院の生徒の他、無料で周辺の市民に対しても食事が振る舞われ、生活品のバザーもしばしば行われる。また 20 名分に満たない数ではあるが学院で学ぶ留学生には寝室が用意されている。それらの援助を受けつつ学ぶ生徒たちは、文字通り寝食を共にしながら日々イスラームの修学に努める。

そうした様子を効果的に宣伝しているのが、アブー・ヌール制作の映像作品『孤児教育におけるシャイフ・アフマド・クフターロー財団の役割』（二部構成）である[24]。同作第一部はある少年が唯一の家族である父を亡くして孤児となるドラマ仕立てのシーンから始まり、続いて画面は健康や教育の重要性について身振り手振りを交えて熱弁する説教中のクフターローの姿へと移る。そして貧困世帯に食料や衣類、また生活費を支給しているアンサール職員と、喜ぶ子供の姿が映像とナレーションで描かれる。

女児への衣類支給の様子

男児への自転車支給の様子

またアンサールの活動の新しい軸となった各種教育活動の様子も細かく映し出される。作中後半ではイスラーム学教室等、アンサールのサービスを受けた若い生徒たちのインタビュー映像が流れる。その中には世俗教育の科目やコンピューター教室等の職業訓練を受けることができた喜びを語る生徒もいるが、多くはイスラーム学受講者が登場して、それまで受けられなかった充実したイスラーム教育を受けることができた喜びを語る。その中では、「自分はここで生まれ変わった」といった情熱的な感想も述べられている。

映像作品第二部においても、子供達がアンサールの生活費・用品の支給や教育のサービスを受け、またスポーツ等のレクレーションに参加している様子が映し出されており、特に孤児院の活動に焦点が当てられる。そして第一部同様、孤児院出身あるいはアンサールのサービスを受けた生徒によるインタビュー映像が流れる。それらに加え、第二部では幅広い年齢層を対象としたサービスを行っている様子が紹介され、クフターローの兄弟子または弟子にあたる当地の高名なイスラーム学者が成人男女に講義を行っている様子、また医療サービスを提供している様子も映し出される。

女子生徒への教育

アンサールで学んだ喜びを語る生徒

アンサールの活動指針に倣い、映像作品の中で主眼が置かれているのは一つに生活費・用品の支給である。アンサール職員が配給を行う様子はダマスカス市内の中でも貧しく、古い建築が立ち並ぶルクヌッディーン地区の町並みを背景として効果的に映し出される。そしてもう一つの主眼は教育である。教育は世俗教育の科目も含まれるが主にモスクやアブー・ヌール・イスラーム学院を通したイスラーム教育が中心に紹介され、その様子は最早孤児支援を行う公益法人やローカルNGOに留まらない宗教活動団体としての存在感を示している。中でも生徒のインタビュー場面ではアンサールによって経済的に救われた喜び以上に、そこで受けた教育と信仰への矜持についての発言が中心となる。アンサールによる孤児支援、教育へのこだわりの効果としては、このような宗教的英才教育を施されたアンサール出身者が次代のアブー・ヌールを担うようになるといった人材育成の側面も見られる(25)。

その意味で重要となるのは、2007 年にアブー・ヌール・モスクの至近に新しく建設された女児用の孤児院である。孤児院は 2008 年 3 月の時点で約 150 名のシリア人児童を受け入れており、教育や遊戯の場を提供している。孤児院の入所条件はただ「両親のいずれかを亡くした女児」という柔軟なもので、宗教や人種の別は問われない。所内では女性職員が「お母さん」と呼ばれ、児童との「家族生活」が実践される。生活面の支援としては衣類や文具等の日用品が支給される他、料理や洗濯といった作業を共同で行うことで家事教育の機会も提供される。娯楽としては映画鑑賞から折り紙教室(26)、クルアーン読誦等が行なわれる。また教育支援としては、初等教育はダマスカス市内の公立学校を紹介、斡旋しており、イスラーム教育は

アブー・ヌール・イスラーム学院のカリキュラムを適宜活用している。卒院時期は就職や結婚にあわせて柔軟に対応しており、国内の他の孤児院が卒院時期を 13 歳と定めていることを考えれば、アンサールの特色と言える点である。

クフターローにとって、アブー・ヌール・モスクの至近に女児のための孤児院を設立することは、先んじて男児用孤児院をダマスカス郊外に設立したアンサールの活動における悲願であったという。以前からクフターローは女子生徒の教育に熱心であることが知られており、生前アブー・ヌール・モスク北側の道路を一本挟んだ女子寮に女学生とともに一時期住んでいた話は有名である。孤児院はまだ新しいが、いずれそこからアブー・ヌールの女性スタッフとなる人間を輩出することにもなるだろう。アブー・ヌールの活動の展開については、シャイフ・アフマド・クフターロー財団の公式ウェブ・サイトでも確認できる(27)。

以上のようなアブー・ヌールの社会貢献活動の意義を考えると、その活動内容自体もさることながら、複合機関アブー・ヌールに対する評価を重層的なものとしている点が興味深い。例えば［Pinto 2006］ではアブー・ヌールが「慈善活動を行うスーフィー教団」と紹介され、スーフィズムがイスラームにおける道徳的側面と解釈されている。実際の貧困者救済活動の過程でクフターロー及びアンサールによるスーフィズムへの言及はないものの、スーフィー教団を組織的母体として彼らが活動することで、アブー・ヌールの慈善活動とスーフィズムとの連続性が想定、評価されるのである。つまり、アブー・ヌールはその活動を展開する過程で従前備えていた組織の性格、存在感を失うことなく、むしろアンサールとその活動に対して得られた評価を、遡及的にモスクやスーフィー教団という母体への評価として反映させることに成功している。

そしてもう一つの重要な意義として、宗教団体の活動にあたって慎重を要する現代シリアにおいて、貧困者や孤児の支援といった活動がアブー・ヌールの新たな存在意義として期待される点が挙げられる。2004 年 9 月にクフターローが逝去したことを受けて、彼の末子であるサラーフッディーンがアブー・ヌールの後継者となった。しかし彼は 2009 年 6 月にアブー・ヌール資金横領の容疑でシリア当局に逮捕され、アブー・ヌールは指導体制の変更をワクフ省の任命によって変更させられるに至った。それによっ

て以後、アブー・ヌールは宗教間対話の活動に象徴される「海外志向」路線の修正を余儀なくされ、地域密着型の活動方針を採る必要に迫られた。しかしアンサールに関してはそもそも地域レベルでの活動から始まり、現在もそれを中心としているため、その活動内容に影響は出ていない。人事に関しても代表であったサラーフッディーンの更迭以外に当局の介入はなく、アンサールの存在は新しく取り組むべき地域密着型活動を象徴するものとして、むしろアブー・ヌールの強みとなっている。

このようにアブー・ヌールは、母体となるスーフィー教団を始めとした宗教団体としての看板を損なうことなく、宗教領域を超えた活動を可能としている。そこでは「宣教活動か、あるいは宗教色を抑制しての社会活動か」といった二者択一に直面することはなく、むしろ多肢選択の結果、アブー・ヌールへの評価に効果的な重層性をもたらすことに成功したと言えるのである。

6. おわりに

ムハンマドの時代に確立した喜捨、そしてその後のイスラーム法学によって整備されたワクフに代表される各種の社会貢献は、ムスリム社会の生活に根付いた豊かな歴史を持つ。特にワクフは、現在 BHN と呼ばれる人間の生活基礎分野を広く賄うものであった。しかし 19-20 世紀の近代化、国民国家誕生の過程でそれらの義援としての性格は弱まった。シリアにおいても（ワクフが「停止」を意味する語であることから）「ワクフ・ワーキフ（ワクフは止まった）」といった駄洒落が皮肉として聞かれるほどである。

クフターローはそうした状況で政教、官民にまたがった活躍を続け、それに連動して宗教センター・アブー・ヌールも多彩な活動を展開した。貧困者救済を掲げるアンサールも、クフターローの活躍に比例してその規模と内容の充実化を果たしてきた。アンサールの活動の意義はまずもってその内容にあるが、宗教団体の活動という観点からは、今日的展開と伝統の維持の両立を果たしたという点が非常に重要である。アンサールはスーフィー教団やアブー・ヌール・モスクといった母体の存在感や価値を損なうことなく、むしろそれらの再評価を促すことに成功している。

アブー・ヌールの活躍は、西洋の世俗化論とは一線を画す、ムスリム社会の信仰生活を背景としている。しかし一方で現代シリアはその背景を少なからず否定する社会状況にあり、アブー・ヌールの成功は当然の帰結では決してなかった。成功の要因として、指導者であったクフターローの積極的な行動主義が挙げられることは間違いない。しかし同時に、クフターロー自身は言及しなかったスーフィー教団に対する賛辞が結果としてアブー・ヌールの社会貢献活動を巡る評価に含まれる等、情宣の際の彼の慎重さがアブー・ヌールの「宗教活動」と「社会活動」の両立にあたって奏功した側面もあったと言えるだろう。

【付記】本稿の現地調査にあたっては、日本科学協会・笹川財団研究助成（2009 年度）による援助を受けた。また本稿の内容は全て筆者自身の観点に基づくものであり、筆者所属の在サウジアラビア日本大使館の意見を何ら代表するものではない。

註

(1) ムスリム社会を対象とした近年の研究であれば例えば［Bonner, Ener, Singer 2003; Cohen 2005; Sabra 2006］。

(2) 歴史学による王朝史研究や政治学による国家動向分析が盛んなイスラーム／中東研究における「世俗化」考察の中心は世俗主義政策である。脱呪術化され、理性を身に付けた個々人によって社会が構成されるという「近代化」が、イスラーム世界においては啓蒙主義的脱イスラーム主義と言うべき教条的な政治勢力を生み、聖性を持たない権力統制の下で（諸）宗教が平和的共存を果たすという「世俗主義」が翻って政治的不安定や宗教弾圧を生むという逆説的状況には、多くの研究者の関心が寄せられてきた［澤江 2008: 421-424］。

(3) 本稿におけるクルアーンの日本語表現に関しては『コーラン』（井筒俊彦訳、上・中・下、1957、1964、1958、岩波書店）に倣う。またハディースの日本語訳及び引用の表記に関しては『ハディース イスラーム伝承集成』（牧野信也訳、1-6 巻、2001、中央公論新社）に倣う。

(4) 喜捨は成人し、正気を保ち、金銭や農作物等に関する一定以上の収入を得ている全てのムスリムの義務であり、翻って十分な財を保有しつつ喜捨を怠る者には来世で厳しい懲罰が与えられる。

(5) ここで引用したクルアーンの節における「施し」の原語は「サダカ –adaqah」である。ザカートとサダカの区別に関しては、ムハンマドの時代以降、法学派見解による区別や国家によるザカート制度化等を受けて、ザカートがその量や方法等を含めて義務として課される施しであるのに対し、サダカは自発的でよ

り広範な施しを指すようになった。ただしクルアーン中の両語の区別は時に不明瞭で、同義とされることも多い［i.e. al-Sulṭān 2010］。スンナ派ムスリムの間で広く参照されるクルアーン注解書『イブン・カスィールの注解 *Tafṣīr Ibn Kathīr*』や『ジャラーラインの注解 *Tafṣīr al-Jalālayn*』等は本節の「サダカ」を「ザカート」と同義としている。

(6) ザカートは、懲罰によるものを除いた国家による強制的な課金である税金と必ずしも一緒ではないが［al-Sulṭān 2010: 27ff.］、年間を通した金銀、農産物、商品、家畜といった財産の所有量によって支払い能力及びその程度を計るという点では近代税制度上の財産法に相当する。

(7) 2011 年 3 月 18 日、サウジ国営放送によるアブドゥッラー国王の演説。2011 年 6 月 20 日、*al-Riyadh* 紙、1 面。

(8) 2011 年 5 月 9 日、*al-Riyadh* 紙、11 面。

(9) サウディアラビアの学者たちによる法裁定（ファトワー）集。

(10) 2011 年 6 月 20 日、*al-Riyadh* 紙、1 面。

(11) 特にモスクに関して言えば、ワクフで賄われたモスクが賽銭箱を設置することで喜捨を奨励、徴収する空間としても機能しており、ザカート／サダカとワクフが相乗的に貧困者救済に貢献している様子が今日でもうかがえる。

(12) オスマン朝の研究によれば同国経済の内 17 世紀は 15.97%、18 世紀は 26.8%、19 世紀は 15.77%がワクフの占める割合であった［オズトルコ 2010: 31］。

(13) 公共性という点に関して言えば、近代のワクフ再編の過程で「公共性を持たない」という観点から、子孫を受給者と設定する「家族ワクフ」の合法性が疑われ始め、やがて国によっては完全に廃止された。

(14) 「ワクフ省」として単独で存在するか、あるいは「イスラーム事項」といった名称を冠した宗教活動を担当する省庁がワクフを管轄する場合が多い。

(15) 今日ではワクフ担当以外の機関がモスクの設備維持に取り組む場合もある。例えばサウディアラビアではモスクのインフラの一部を水電力省が担当している。

(16) スーフィズムは本邦では特に「イスラーム神秘主義」の訳語で広く知られる。

(17) バアス党は 1940 年代に「アラブの統一」「植民地主義からの解放」「社会主義」の三原則を掲げてシリアからイラク、ヨルダン、レバノンへと広がった汎アラブ民族主義の政党である。

(18) オスマン帝国の軍人であったザイームはケマル・アタテュルク（トルコ共和国初代大統領）の世俗主義の思想に影響を受けていた［末近 2005: 187］。

(19) 大ムフティーの職はエジプトやモロッコ等、一部を除く多くの現代ムスリム諸国において、公式の宗教職としては最高位とされる。

(20) クフターローの宗教間対話の詳細については拙稿［高尾 2009］を参照。

(21) 「アンサール」はアラビア語で「援助者たち」を意味し、かつてマッカで迫害を受けて移住した預言者ムハンマド一行を受け入れたマディーナの人々を指す。

(22) 語学はアラビア語、フランス語、英語の教室が設けられ、アラビア語は外国人も受講が可能である。アラビア語とフランス語は公立学校の春休み期間の朝及び平日夜に開かれ、英語は公立学校の春休み期間の朝のみである。パソコン教室は OS の基本操作やワード、エクセル等のソフトウェア習得を内容としており、春休み期間の朝に開かれている。受講対象者は特に子供であり、彼らは無

償で、男女別の教室でそれらを受講することができる。なおその他、青年向けに救命処置教室（9 日間の集中講座）も設けられている。

(23) 以下の日本外務省ウェブ・ページ「日本外務省：草の根・人間の安全保障無償資金協力約束日別、平成 16 年度」（ 2008 年 12 月 20 日閲覧）を参照。http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/zyoukyou/h_16/gctb_0503.html　それによると締結日：2005 年 3 月 10 日、分野：教育研究、案件名：ルクヌッディーン地区貧困者及び孤児対象職業訓練所設置計画、被供与団体名：アンサール慈善協会、団体の性格：ローカル NGO、邦貨：9,970,950（円）とある。なおシリアにおける JICA の活動は以下を参照。http://www.jica.go.jp/syria/index.html

(24) 2004 年、シャイフ・アフマド・クフターロー財団制作（第一部 17 分 40 秒、第二部 18 分 18 秒）。なお同財団は映像制作部署を設けており、モスクでの講義や説教、また様々な催しを記録して Video CD で配布、販売している。

(25) 実際、孤児院出身で現在アブー・ヌールに勤務しているスタッフも居る。

(26) JICA・海外青年協力隊による日本文化紹介の活動。

(27) http://www.abunour.net/ アンサールのページも含まれているが独自 URL はない。

参考文献

岩武昭男 1994 「公益・福祉制度――ワクフ」板垣雄三監修・後藤明編『文明としてのイスラーム』栄光教育文化研究所、219-256。

―――1999 「イスラーム社会とワクフ制度」『イスラーム世界の発展―7-16 世紀（岩波講座世界歴史 10）』岩波書店、269-291。

大塚和夫 2004 『イスラーム主義とは何か』岩波書店。

後藤明 1993 「イスラーム国家の成立」佐藤次高・鈴木董編『都市の文明イスラーム』講談社、59-100。

櫻井義秀 2011 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』1、27-51。

澤江史子 2008 「イスラームと世俗主義」小杉泰・東長靖・林佳世子編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、421-424。

末近浩太 2005 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版。

高尾賢一郎 2009 「シャイフ・アフマド・クフターローの宗教間対話―大本との交流」『イスラーム世界研究』3(1)、310-324。

東長靖 2010 「スーフィズムの成立と発展」佐藤次高編『イスラームの創始と展開』山川出版社、155-195。

福田安志 2000 「サウジアラビアにおけるザカートの徴収－イスラームの税制と国家財政－」『イスラム世界』55、73-93。

オズトルコ，ナジフ 2010 『トルコ・イスラーム文明における非政府組織：ワクフ―その伝統と「作品」』東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ。

Bonner, M., Ener, M., Singer, A.(eds.) 2003 *Poverty and Charity in Middle Eastern Context*. New York: State University of New York Press.

Cohen, Mark R. 2005 *Poverty and Charity in the Jewish Community of Medieval Egypt*. Princeton: Princeton University Press.

De Jong, Frederick 1985 "The Naqshbandiyya in Egypt and Syria: Aspects of its History, and Observations Concerning it's Present-Day Condition," in Marc Gaborieau, Alexandre Popovic & Thierry Zarcone (eds.), *Naqshbandis: Cheminements et Situation Actuell d'un Ordre Mystique Musulman*. Paris & Istanbul: Éditions ISIS, 589-601.

Ḥabash, Muḥammad 1996 *al-Shaykh Aḥmad Kuftārū wa manhaj-hu fī al-tajdīd wa al-iṣlāḥ*. Damascus: Dār al-Rashīd.

al-Jiraysī, Khālid bin 'Abd al-Raḥmān 2011 *Fatwā 'Ulamā' al-Balad al-Ḥarām: Fatāwā Shar'iyyah fi Masā'il 'Aṣriyyah*. Riyādh: Maktabah al-Malik Fahad al-Waṭaniyyah Athnā' al-Nashar.

Leeuwen, Richard v. 1999 *Waqfs and Urban Structures: the Case of Ottoman Damascus*. Leiden & Boston & Köln: Brill.

Luizard, Jean P. 1996 "Le Moyen-Orient Arabe," in Alexandre Popovic & Gilles Veinstein (eds.), *Les Voies d'Allah: Les Ordres Mystiques dans le Monde Musulman des Origines à Aujourd'hui*. Paris: Fayard, 342-371.

MANI: Mujamma' Abū al-Nūr al-Islāmī (ed.) 1997 *Jam'iyyah al-Anṣār al-Khayriyyah bi-Dimashq*. Damascus: Mujamma' Abū al-Nūr al-Islāmī.

Pinto, Paulo G. 2006 "Embodied Morality and Social Practice in Syria," in *ISIM (International Institute for the Study of Islam in the Modern World) Review* (17) Spring 2006, Leiden: ISIM, 14-15.

Sabra, Adam 2006 *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mamluk Egypt*, 1250-1517. Cambridge: Cambridge University Press.

Salvatore, Armando 2007 *The Public Sphere: Liberal Modernity, Catholicism, Islam*. New York: Palgrave Macmillan.

al-Sulṭān, Sulṭān bin Muḥammad bin 'Alī 2010 *al-Zakāt: Aḥkām wa Taṭbīq Muḥāsibī*. Riyādh: Dār Wābil li-Nashar.

Vol, John O. 1994 *Islam: Continuity and Change in the Modern World (Second Edition)*. Syracuse: Syracuse University Press,

Walker, Bethany 2008 "Rural Sufism as Channels of Charity in Nineteenth-Century Jordan," in Nefissa Naguib & Inger Marie Okkenhaug (eds.), *Interpreting Welfare and Relief in the Middle East*. Leiden & Boston: Brill, 217-234.

Zisser, Eyal 2005 "Syria, the Ba'th Regime and the Islamic Movement: Stepping on a New Path? " in *The Muslim World* (95), 43-65.